



巻頭言

化学系博士人材の育成： 負の連鎖からの脱却と飛躍



澤本光男 Mitsuo SAWAMOTO

中部大学先端研究センター 特任教授, 京都大学 名誉教授, 日本化学会 常務理事・代表理事

かつて「末は博士か大臣か」と言われ、博士は社会から期待と尊敬を集め、また「出世払い」に象徴されるように温かく見守られてきたが、今やこれらの言葉は古語になったようにみえる。隣国とは対照的に、日本の科学・化学の競争力・研究力の順位は年を追って低下し、その原因か結果かは定かではないが、大学における博士課程進学者数はこの十数年間で横ばいか漸減しつつある。なぜそうなのか、何を怠ってきたのか、そして何をなすべきか、そのような問い掛けと議論が行われて久しい。

本号『化学と工業』誌 2023 年 3 月号では、この問いに対して新たな視点から、特集「科学技術立国を支える化学系博士人材を殖やす」が企画され、産学から考察や提言が寄せられている。本誌においても、菅裕明会長の「まずは世界と競い合える化学人材を」(2022, 75, 375)をはじめ議論が進み、日本学術会議でも長く分析と討議が続けられてきた。

確かに、明治時代から西欧に畏敬を込めて「追いつけ追い越せ」と、我が国の科学と技術は著しく発展し、戦後の高度成長期を経て、もはや「西欧に学ぶ時代は去った」とされ、本邦初公開の導入や改良ではなく、独自の科学と技術が求められるようになった。それに呼応して、大学の博士課程の拡充(大学院重点化)が図られ、卓越研究拠点の設置、学生支援機構による貸与制度、日本学術振興会による DC 支援などの制度も整ってきた。日本化学工業協会にも、会員各社協賛の下「化学人材育成プログラム」が設けられている。

とはいえ、学生にとっては、学位取得に5年を要し経済的負担も大きく、その割に企業での待遇も(修士就職の同級生に比して)格段に高いとはいえない；企業にとっては、博士修了者は視野が狭く柔軟性・協調性に欠け、それもあって博士より修士を優先採用したい；大学では定員削減の下、教員としての採用が難しいなど、学生-企業-大学の三要素からなる、いわゆる「負の連鎖」(負のスパイラル)が指摘されてきた。この連鎖のどこが起点(原因)でどこが終点(結果)なのかにも諸説があって定かではない[私見では、博士課程は、大学での(極度に専門分化した)後継者育成ではなく、学においては卓越した研究力と競争力をもち、また企業での活躍を視野にいたした「国際感覚と情報発信力に長け、異分野にも柔軟に対応できる、独創的でしなやかな独立した研究者」の育成を目指すべきであり、博士学位はその証しとしての資格認定であって、ここから「正の連鎖」(博士進学者の増加-博士採用の増加と活躍-優れた博士人材育成-研究力の強化)が始まると考えており、そう努めてきたつもりではある]。

改めて、なぜそうなのか、そして何をなすべきか、本特集をきっかけとし、「化学系博士人材を殖やす」という岩盤的ともいえる課題に対し、「負の連鎖」から「正の連鎖」へと脱却し、本年の干支にふさわしい、科学技術立国に大きく貢献する飛躍を期待したい。

© 2023 The Chemical Society of Japan